公立幼稚園・保育所の新任保育者における就業上の課題

― 勤務状況と保育職への思いに着目して ―

新井美保子

1. 問題の所在と目的

ここ数年、長時間労働や正規・非正規労働者の格差が問題化し、政府においても第１回働き方改革実現会議が 2016 年 9 月に開催されるなど、労働者の視点に立った働き方改革を目指す動きが始まっている。2017 年 3 月に働き方改革実現会議で決定された「働き方改革実行計画」によると、今後の取り組みの基本的考え方として、「『働き方』は『暮らし方』そのものであり、働き方改革は、日本の企業文化、日本人のライフスタイル、日本の働くということに対する考え方そのものに手を付けていく改革である」と述べている[1)]。そして、課題として「正規・非正規」の働き方による不合理な処遇の他、「長時間労働」が健康の確保だけではなく、仕事と家庭生活との両立の困難さや、少子化、さらには女性のキャリア形成や男性の家庭参加を阻む原因になっていることを指摘している。働き方において、「ワーク・ライフ・バランス」の視点を抜きにしては改善が困難な時代が到来してきたことを物語っている。就職を目指す学生についても、労働第一ではなく、家庭又は個人の生活も大切にする「ワーク・ライフ」社員を目指す動きが指摘されており[2) 3)]、今後は労働人口の減少が見込まれる中で、若者に選ばれるようなワーク・ライフが可能な労働条件を提示し実行できる職場かどうかが問われている。この点において、保育職は適切な労働環境にあると言えるだろうか。

保育現場では特に都市部において急速な保育士不足現象が生じ、正規保育士を募集しても応募者が集まらなかったり、予定する人数を採用できなかったりする状況を耳にする。臨時保育士は年間通しての募集が常態化し、やむを得ず無資格者を「保育指導員」等の名称で雇う場合も見られる。このような保育士不足の原因の１つには、業務内容に対して適切とは言い難い低賃金の問題があり、処遇改善が叫ばれてきた。公立園の場合は一般行政職としての扱いで採用される場合も多く、専門的な資格を取得した専門職員でありながら、その専門性を正しく評価されているとは言い難い。幼稚園教員の場合も、例えば愛知県内の場合、公立では名古屋市以外の自治体はすべて保育士との一括採用であり、状況は同様であると言えよう。

また、幼稚園教員を含めて保育者の早期離職も課題の１つである。離職には様々な要因が考えられるが、若年保育者が辞めたくなる理由としては、公立幼稚園では「仕事量が多すぎる」、公立保育所では「職場内の人間関係」が特に高率になっている[4)]。幼稚園は保育所と比較して子どもに直接関わる保育時間が短いが、仕事量が多いという理由はどのような事態から生じているのであろうか。一方、保育所では勤務に時間差を設けるなどにより長時間保育や土日の保育にも対応している。その点で長時間勤務やワーク・ライフ・バランスについての問題点は生じないように思えるが、実態はどのような状況であろうか。幼稚園も保育所も、上記のような「長時間労働」や「正規・非正規」の問題、新任保育者としての職場定着の問題は生じていないのだろうか。

愛知教育大学　幼児教育講座

そこで、就職したばかりの新任保育者を対象にアンケート調査を実施し、保育職への考えと日頃の勤務状況から問題点を明らかにし、改善のための方策を検討したい。今回の調査対象は、同じ環境で学んできた本学卒業生に限定し、給与等においても一定程度保障されている公立園の保育者を対象として実施することにした。公立園の勤務状況を扱った先行研究が少ないことと、公立園に限定することで保育内容・保育方針等のばらつきを抑え、ほぼ同じ条件下での勤務を前提として調査を行うことができると考えたからである。

2. 調査方法

(1) 調査目的

新任保育者の保育職に対する意欲や業務上の課題を探ることにより、保育職からの早期離職を防止する方策や、家庭生活との両立が可能な就業の在り方について検討する。

(2) 調査時期

2013 年～ 2015 年の各 6 月下旬～ 7 月上旬。

毎年の対象者数が少ないため、3 年分を集計した。

(3) 調査対象

本学幼児教育選修を卒業し公立幼稚園・保育所に正規保育者として就職している卒業 1 年目の保護者 35 名。

(4) 調査方法

大学主催の近況報告会の場で調査用紙を配布し、記入後、その場で提出してもらった。

(5) 調査内容

①園の職員構成

②保育職に就職したことに対する意識と生活の現状

③保育業務についての課題

3. 結果

(1) 調査回答者

東海地方の公立園に正規職員として勤務する保育者 35 名。担当年齢は、表 1 の通り。

表 1　回答者の担当年齢　（名）

	0・1 歳児	2 歳児	3 歳児	4 歳児	5 歳児	3・4・5 歳児	計
幼稚園	—	—	7	7	4	0	18
保育所	4	6	4	1	1	1	17

(2) 園の職員構成

①正規保育者数

表 2　1 園当たりの平均正規職員数と年齢構成（休業中の職員を除く）　（名）

	新人	2、3 年目	4 年目以上の 20 代	30 代	40 代以上	計
幼稚園	1.1	0.8	1.4	1.1	2.9	7.4
保育所	1.1	1.4	2.1	1.9	3.9	10.4

園に勤務する正規保育者数（休業中の職員を除く）とその経験年数・年齢構成を尋ねた。1 園当たりの平均人数は表２の通りである。保育所における最多保育者数は 17 名、最少は 6 名だった。幼稚園は最多が 12 名、最少は 4 名だった。正規職員に限定した数字であるが、最少の 4 名で運営している幼稚園は、回答した新人の他の 3 名がすべて 40 代以上であり、組織としての年齢構成にもかなり偏りがあるといえる。

保育所で正規保育者数が多くなっている背景には、低年齢児保育の実施があると思われる。今回は総保育者数を尋ねなかったため正規保育者率がどの程度か不明であるが、幼稚園、保育所それぞれにおいて正規数は決して多くないと推察され、新人保育者でも貴重な正規職員の一人として責任ある業務を担っていると考えられる。

②１クラス当たりの担任の人数

回答者と一緒にクラスを担当している人数と正規･非正規の区別を尋ねたところ､表３の通りであった。幼児組は幼稚園・保育所ともに正規は１名であり、幼稚園には非正規がわずかに入るものの、保育所には入っていない場合が多い。保育所は０～２歳児組が正規と非正規による複数担任制であることがわかる。基本的には、新人の正規１～２人に非正規１人という組み合わせであり、保育の責任は正規職員である新人が担う場合もあることを考えるとクラス運営の難しさが懸念される。

表３　１クラス当たりの保育者数（回答者クラスの場合）

		0・1 歳児	2 歳児	3 歳児	4 歳児	5 歳児	3・4・5 歳児	平均
幼稚園	正　規	—	—	1.0	1.0	1.0	—	1.0
	非正規	—	—	0.6	0.7	0.3	—	0.6
	計	—	—	1.6	1.7	1.3	—	1.6
保育所	正　規	1.8	1.8	1.0	1.0	1.0	1.0	1.5
	非正規	1.0	1.2	0.3	0	0	0	0.8
	計	2.8	3.0	1.3	1.0	1.0	1.0	2.3

(3) 保育職に就職したことに対する意識と生活の現状

①保育職への満足度と魅力

保育職に就職して良かったと感じているかどうかを尋ねたところ、幼稚園、保育所ともに８割以上が「とても良かった･良かった」と回答している（図１）。その理由としては、「子どもが可愛い」「子どもとの関わりが楽しい」「子どもたちの成長が嬉しい」「毎日いろいろなことがあって面白い」等の回答が多かった。また、「保育職の魅力」を尋ねたところ、「子どもの成長を間近で見られること」とする回答が圧倒的に多く、他には「毎日新しい発見や変化がある」「成長を支えられる」など

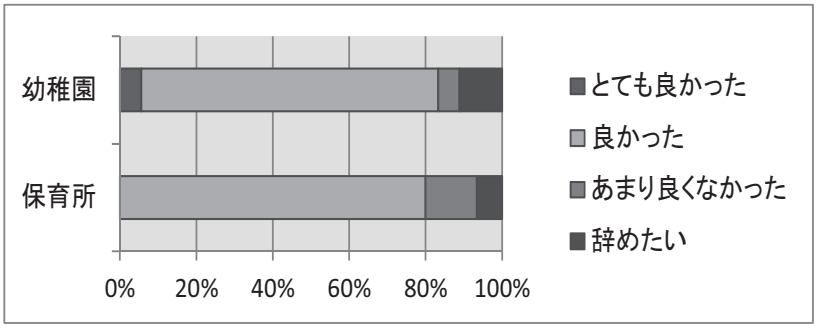

図１　保育職に就職して良かったか

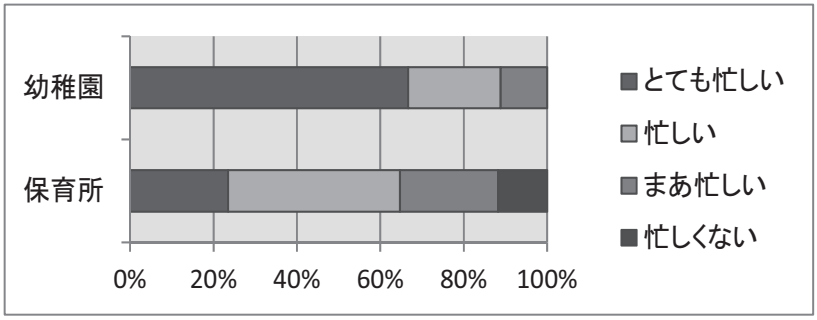

図２　保育職は忙しい

であった。このことから、保育職の魅力は、「子どもと関わる楽しさ・面白さと、成長を間近で見られること」であり、多くの新任保育者がその職業に満足している様子がうかがえる。

②保育職の大変さ

その一方で、「辞めたい」との回答も３名あり、人間関係の難しさをその理由に挙げていた。そこで、保育職の大変さについて尋ねたところ、「仕事量が多い」との回答が多く挙げられた。「仕事に終わりがない」「持ち帰り仕事が多い」「事務仕事が多い」「日々の記録や親との関わり」など、日中の保育以外の仕事の多さが負担になっている様子がわかる。合わせて「仕事の忙しさ」を尋ねたところ、図２に示した通り、「とても忙しい」とする回答が全体で 45.7％と半数近くを占め、「忙しい」を含めれば８割近くに及ぶことがわかった。特に幼稚園で多忙感が強く、「とても忙しい」とする回答だけで６割を超えている。幼稚園は保育所に比較して保育時間が短く、時間に余裕があるように見えるかもしれないが、前述した通り１園あたりの正規職員数が平均 7.4 人と少なく、園全体の業務である行事等の企画や準備に加え、様々な事務的業務を各担任で分担せざるを得ない実態がある。園の規模にかかわらず、園運営には最低限度必要な業務がある。具体的に園にどのような業務があり、保育者以外にどのような人材が必要なのかを明確にすることで、本来の保育者としての専門性を発揮できるのではないのだろうか。特に新任保育者にとっては日々の保育準備･実践だけでも大変であるところに、養成校では学ばなかった事務業務が重なることは、大きな負担になっていると考えられる。長時間労働については小中学校教員が話題になることが多いが、保育職の場合も決して例外ではない。

③勤務時間と疲労度

では、一日当たりの勤務時間はどうなのか。帰宅後も持ち帰り仕事が多いという保育職であるので、正確な労働時間はわからない。ここでは家を基準に、最も多いパターンで出勤時間と帰宅時間を答えてもらった。その結果、家を出る時間の平均は、幼稚園が６時 53 分、保育所は７時 20 分であった。幼稚園の回答は６時 15 分～７時 45 分の幅があり、６時 45 分が最多であった。保育所の回答は６時 45 分～８時 00 分の幅があり、７時 30 分が最多となっていた。保育所に比較して幼稚園勤務者は約 30 分早く家を出ている状況であることがわかる。次に、帰宅時間は幼稚園が 19 時 59 分、保育所は 19 時６分であり、幼稚園の方が 53 分も帰宅が遅いことがわかった。幼稚園の回答は 18 時 30 分～ 21 時 00 分と幅広く、20 時 00 分という回答が最も多かった。保育所は 18 時 00 分～ 20 時 00 分の回答で、19 時 00 分が最も多い回答となっていた。このことからも保育所より幼稚園勤務者は１時間帰宅が遅い状況であることがわかる。結果として、幼稚園勤務者は保育所勤務者より平均して在宅時間が１時間半短くなっており、それだけ負荷がかかっていることが予想される。保育所もこの時刻以外に早朝保育勤務や夕方の延長保育勤務になる場合があるだろうが、いずれにしても時差勤務で保育業務を行っている勤務体制であるだけに、勤務時間を意識した運営が長時間勤務の抑制につながっているのではないかと考える。

日々の疲労状況について睡眠と関連させて尋ねたところ表４の通りであった。幼稚園では「眠れるが疲れはとれない」が５割で最も多く、「気になることが多くてよく眠れない」とする回答も２割に達した。保育所でも同様に「眠れるが疲れはとれない」が８割に達している。新任保育者は十分な疲労回復もできないままに日々の保育や業務に携わっており、特に幼稚園勤務者において状況が深刻であることがわかる。

表４　日々の疲労感と睡眠に対する意識

	よく眠れて 疲れも残らない	眠れるが 疲れはとれない	寝不足で 疲れがとれない	気になることが多くて よく眠れない
幼稚園	2（11.1）	9（50.0）	3（16.7）	4（22.2）
保育所	3（17.6）	14（82.4）	0（ 0 ）	0（ 0 ）
計	5（14.3）	23（65.7）	3（ 8.6）	4（11.4）

④正規職員についての意識

正規職員として就職して良かったと思うことがあるかどうかを尋ねたところ、良かったと思うことがある者は幼稚園 16 名（88.9％）、保育所 14 名（87.5％）と、ともに高率になった。良い理由として「ボーナスがあること」という回答が多く、他にも「給料がよい」「安定している」という回答など、給与に関する内容が目立った。給与の条件の良さが正規職員の意欲の向上につながっていることが考えられる。

一方、正規職員の仕事を負担に感じることがあるかどうかを尋ねたところ、幼稚園では 14 名（77.8％）が、保育所では 15 名（88.2％）が「ある」と回答した。具体的な内容として、「責任が重い」「書類作成」という回答が多く、「行事や係の担当がほぼ正規職員にどんっとくる」「正職は休憩がない」「子ども同士のトラブルも正規の責任になる」などの記述も見られた。この 10 年間で急速に非正規職員が増加し、新任の正規職員は実力が不十分な中で職場のリーダー的な役割を果たさなければならず、一層負担感を重くさせていると考えられる。正規・非正規の二重構造が職務遂行の難しさを生む要因の１つになっていると言えよう。

(4) 保育業務についての課題

新任の場合、様々な業務が不慣れで戸惑ったり緊張したりするために、疲労が重なることが多いと予想される。そこで、いつ頃になれば保育の様々な業務等に慣れてくるのかを尋ねたところ、結果は図３、４に示した通りとなった。この調査を実施した時期が６月下旬～７月上旬であったので、６月下旬を一区切りとしたが、その時点では「まだ慣れていない」とする回答が多いことがわかった。

幼稚園と保育所を比較すると、保育所勤務者の方が全体的に若干早く慣れているようである。保育所では６月に入って特に「同僚の方との関わり方（同僚関係）」や「職場での過ごし方（職場）」に慣れたと感じている様子がわかり、それまでに慣れたとする回答も合わせると、「同僚関係」は約６割、「職場」は５割に達している。また、「指導案･記録」も５割弱、「子どもへの関わり方（子ども援助）」も４割と徐々に慣れてきている様子がうかがえる。しかし、「保育の進め方」や「保護者への関わり方（保護者関係）」「事務業務」は２割程度と低い。

幼稚園でも「職場」については６月に慣れたとする回答が多く、それまでの回答を含めれば５割を

超える。しかし、他の項目は４割に満たず、就職後３か月を経てもなお思うように仕事ができていない様子がうかがえる。特に「事務業務」と「保護者関係」は１割程度の者にとどまっている。保育所においても他の項目と比較して低くなっていることを考えると、新任保育者にとってはこの２項目が特に困難な課題であると考えられる。園長等からの支援や業務軽減が必要であろう。

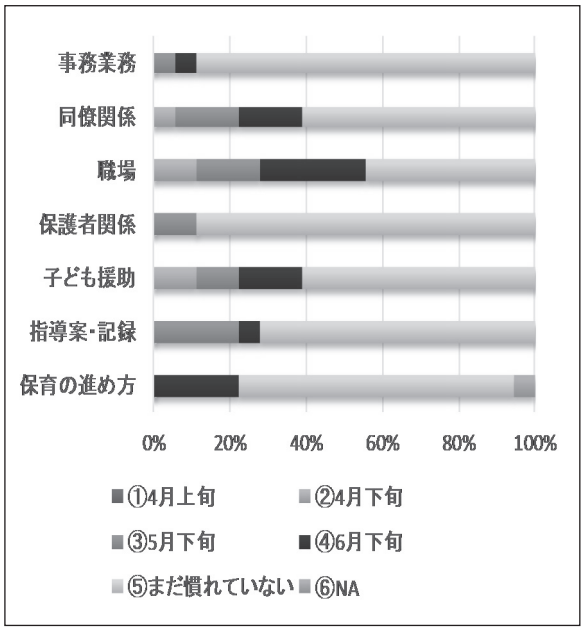

図３　いつ頃仕事に慣れたか（幼稚園）

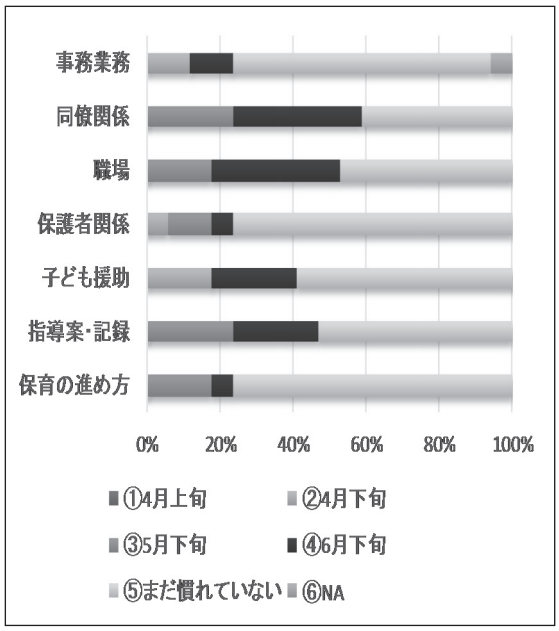

図４　いつ頃仕事に慣れたか（保育所）

4. 考察

新任保育者たちは、十分に睡眠もとれない中で早朝から出勤し、緊張感の中で保育実践や保護者対応、事務業務、記録・指導案作成、保育準備等、責任を伴う様々な業務に取り組んでいる様子が明らかになった。業務内容が多様で量も多く、終わりがないような多忙感の中で、それでも保育職に就いて「良かった」と感じている。その気持ちをつなぎ止めているものは「子どもの可愛らしさ」や「子どもの成長を間近でみられる喜び」であり、安定した待遇である。

しかし、このプラスの条件が僅かでも崩れた場合はどうなるか。「気持ち」だけで責任ある職務に向き合うことは困難ではないだろうか。特に幼稚園は職員数が少なく、結果として事務業務も多く、勤務時間も長くなる傾向が見られた。公立園とは言え、給与も小中学校教員には及ばない。このままでは教育に支障を来すことも考えられる。

今回の調査は、公立園に就職した本学卒業生に限定したため回答者数が少なく、データとしては十分とは言い難い。しかし､保育職に関する一定の問題は明らかになった。これを資料としてさらにデータの収集を試み実態に基づいた改善を今後とも検討していく必要がある。

例えば、この数年、小中学校では「チーム学校」の概念が広がってきた。同様に、幼稚園や保育所でもチームとして運営していく考え方が必要ではないだろうか。新任保育者にとって大きな負担となっている事務業務を担うことができる事務職員の導入や、保護者対応・特別な支援の必要な子どもへの対応として臨床心理士やスクール・ソーシャル・ワーカーの援助等を受けられる制度を構築でき

ないだろうか。

子どもの成長・発達の基礎となる乳幼児期の教育を担い、また保護者の就労支援と子育て支援を担う幼稚園・保育所・認定こども園等は、社会にとって非常に重要な施設であることは言うまでもない。そこに就労する保育者の確保が切実な課題になりつつある現在、他の業種ではなく保育職を若者が選択したくなるような体制の整備が重要である。

引用・参考文献

1）働き方改革実現会議（2017）「働き方改革実行計画」首相官邸ホームページ、p.1
2）土志田るり子（2017）「2017（平成 29）年度　新入社員意識調査アンケート結果」三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング
3）玄田有史（2017）「変化のなかの若者のキャリア形成」Business Labor Trend　2017 年 4 月号、独立行政法人労働政策研究・研修機構
4）社団法人全国保育士養成協議会専門委員会（2010）「指定保育士養成施設卒業生の卒後の動向及び業務の実態に関する調査報告書Ⅱ」保育士養成資料集第 52 号